

中国語を母語とする上級日本語学習者による ヴォイスの誤用分析 —中国語との対照から—¹⁾

望月 圭子

初めに

1 動詞の自他の誤用

1.1 和語動詞の自他の誤用

1.2 漢語動詞における自他の誤用

2 使役形式の誤用

3 受動形式の誤用

4 可能形式の誤用

終りに

初めに

本稿は、中国語母語話者による日本語作文コーパスを基に、自動詞/他動詞、使役形、受動形、可能形といったヴォイス上の誤用に焦点を当てて、対応する中国語を対照させながら、日本語学習における中国語からの母語干渉の要因とパターンを提示するものである。

本稿で扱う作文誤用コーパスは、「誤用パターン別上級日本語学習者作文コーパス」²⁾によるものである。このコーパスに納められている収録作文は、2006年度から2008年度にかけて、東京外国語大学外国語学部日本課程留学生1年生(定員30名)が、主専攻語必修授業としての「文章表現」の授業(A,B二クラス定員15名ずつ)において執筆した作文、及び同課程留学生2年生が主専攻語必修授業としての「口頭表現」(1クラス定員30名)の授業において、20分のミニ講義を実演する発表者に対する評価コメントシートとして執筆した作文である。全員の留学生が、日本語能力試験1級を持ち、高度な日本語読解・作文能力を測る入学試験によって選抜されているという点において、上級から超上級レベルの書きことば誤用データといえる。ちなみに、東京外国語大学日本課程留学生の日本語教育は、1年次及び2年次において、専門的な日本語・日本文化・日本事情の必修教育を週90分×8コマ(1年生)、週90分×6コマ(2年次)を受け、3年次から、日本課程には関係なく、全外国語学部が開講されている希望する講座のゼミに入り、4年次で卒業論文(必修)を執筆するというカリキュラムとなっている。

本コーパスでは、日本語学習者の情報について、以下のように国籍・母語・執筆者識別番号・作文課題番号の順に5種類の英数字を用いて、誤用例の最後に付している。

凡例「C C 6 0 1 _1」
 (国籍・母語・ 収集年度 2006 年・ 執筆者識別番号・ 作文課題番号)
 CC: 中国・中国語、TC: 台湾・中国語、HC: 香港・中国語

課題番号は、文章表現から得られた誤用例にのみ付している。口頭表現の評価シートにおける誤用例には学習者データの後ろに(口)と付している。

なお文章表現課題1～8の内容は以下のとおりである。

課題番号	テーマ
1	自己紹介
2	段落構成練習：「小学生に英語教育は必要か」等の議論の問いかけを各自決めて説得力のある文章を書く。
3	広告の描写：各自が選んだテレビCMや雑誌広告などを文章で描写する。
4	広告の効果：課題3で描写した広告がなぜ効果的なのかを分析する。
5	言語とアイデンティティ：言語とアイデンティティというテーマで文章を書く。
6	私が小学生時代過ごした街
7	夏休みについて：各自が「夏休み」をテーマとし、問いを絞って作文を書く。
8	禁酒車両は導入すべきか：「禁酒車両」を導入すべきかどうかを賛成、反対の立場を明確にした上で作文する。

本稿では、中国語からの母語干渉に焦点を絞り、この作文コーパスのうち、中国語を母語とする中国・台湾・香港の日本語学習者による作文コーパスから、どのような中国語の特徴が自他・使役・受動・可能の誤用と関わっているのかについて考察する。

1 動詞の自他の誤用

自動詞・他動詞の誤用は、和語動詞の自他対応の混同による誤用と、漢語動詞の自他の誤用の二種類に分類される。さらに、和語動詞の自他対応の混同は、単一動詞の場合と、複合動詞の後項動詞の自他混同の場合の二種類に分類される。いずれの場合も、他動詞を使うべきとこ

ろに自動詞を用いる混同が顕著にみられ、中国語を母語とする日本語学習者にとって、超級・上級レベルに達していても、自他対応がある動詞では、自動詞の形式を無意識のうちに選択する傾向が示唆される。

1.1 和語動詞の自他の誤用

1.1.1 単一和語自他対応動詞の自他混同

自他の対応がある単一和語動詞の混同例は、24 例みられた。その内訳を表にすると、以下のとおりである。

表 1 単一和語自他対応動詞の自他混同

混同のタイプ	誤用数	誤用を起こした学習者異なり数
I *自動詞 (→他動詞)	18 e.g. *混ざる (→混ぜる) *伝わる (→伝える)	10
II *他動詞 (→自動詞)	6 e.g. *載せる (→載せる) *通す (→通る)	4
計	24	14

1.1.1.1 他動詞を使うべきところに自動詞を用いた混同

まず、他動詞を使うべきところに自動詞を用いた混同 I タイプでは、(1)のような自他動詞についての混同がみられた。(1)の自他対応動詞のリストでは、いずれも、左側が状態変化を表す自動詞、右側が対応する使役状態変化他動詞で、右側の他動詞を使うべきところに左側の対応する自動詞を用いた混同が、10名の学習者において、18 誤用数みられた。

- (1) 混ざる/混ぜる、出る/出す、変わる/変える、減る/減らす、近づく/近づける、続く/続ける、破れる/破る、かなう/かなえる、渡る/渡す、伝わる/伝える、集まる/集める、加わる/加える、まとまる/まとめる、つながる/つなげる、伝わる/伝える、向く/向ける

次に、実際の誤用例文を対応する中国語と対照させながら挙げよう。

(2) 使役状態変化他動詞を使うべきところに対応する状態変化自動詞を用いた誤用 1

- a. このコマーシャルは前の新聞社の定義を破れて(→破って)、普通の若い人の視点から入った。(CC708_4)
- b. 这则 广告 打破 了 报社 的 陈规,
 Zheze guanggao dapo le baoshe de chengui,
 この コマーシャル 破る 完了 新聞社 DE³⁾ 規定
 加入 了 年轻人 的 观点。
 jiaru le nianqingren de guandian.
 加える 完了 若者 DE 観点

まず、自他対応和語動詞の自他の混同を引き起こす要因として、中国語では、動詞の自他の形態的区別がなく、同じ形態で自動詞にも他動詞にも用いられる「能格動詞」(ergative verb)が日本語の自他の対応に相当する場合が多いことが挙げられる。たとえば、(2)の<打破 dapo>は、日本語の「破る/破れる」の自他対応に相当する能格動詞である。

ここで興味深いのは、何故、日本語の自他の対応のうち、自動詞が混同して選択されることが多いのか、という問題である。単なる自他の混同であれば、状態変化を表す自動詞と使役状態変化を表す他動詞のペアのうち、両者が同じ割合で混同されることが予測される。しかし、実際の誤用データでは、中国語母語話者は、使役状態変化を表す他動詞を使うべきところに、状態変化を表す自動詞を選択することが圧倒的に多いのである。以下、さらに例を挙げよう。

(3) 使役状態変化他動詞を使うべきところに対応する状態変化自動詞を用いた誤用 2

- a. そして、本格的な方言(例えば、福建語、上海語)の中に標準語を混ざって(→混ぜて)しゃべる人もだんだん増えてきました。(CC602_5)
- b. 方言 里 混杂 着 普通话 来 使用 的 人 也
 Fangyanli hunza zhe Putonghua lai shiyong de ren ye
 方言の中に 混ぜる ~ながら 標準語 ~を以って 使用する DE 人 も
 越 来 越 多 了。
 yuelaiyueduo le.
 益々増える 完了

「混ぜる/混ぜる」に対応する中国語動詞は、<混杂 hunza>という能格動詞で、(4a)のような自動詞用法と、(4b)のような他動詞用法がある。

- (4) a. 他说的 上海话 里 常常 混杂 着 普通话。
 Ta shuo de Shanghaihua li changchang hunza zhe putonghua.
 彼 話 DE 上海語 中 しばしば 混ぜる ZHE⁴⁾ 共通語
 彼が話す上海語には、しばしば共通語が混ざっている。
- b. 他 常常 把 普通话 混杂 在 上海话 里。
 Ta changchang ba putonghua hunza zai shanghaihua li.
 彼 しばしば BA⁵⁾ 共通語 混ぜる ~に 上海語 中
 彼は、しばしば共通語を上海語に混ぜる。

(4a)では、「存在場所+動詞<着 zhe>+存在物」という文型の存在や出現を表す「存現文」中で、<混杂 hunza>は、自動詞的な機能を担っている。このように、中国語では、文型から自動詞としての機能が与えられ、動詞そのものの形態が自他の機能によって変わらない。このため、日本語動詞の自他の混同がおこるのだが、この場合においても、使役状態変化他動詞「混ぜる」を使うべきところに、状態変化自動詞「混ぜる」を用いている。

同様に状態変化自動詞を用いた第三の混同例「まとまる/まとめる」を挙げよう。

- (5) 使役状態変化他動詞を使うべきところに対応する状態変化自動詞を用いた誤用 3
- a. 発表内容を、自分の話し(→話)でよくまとまって(→まとめて)いた。(CC702 口)
- b. 用 自己的 话 将 发表 的 内容 好好 整理 出来。
 Yong zijide hua jiang fabiao de neirong haohao zhengli chulai.
 ~で 自分の 話 ~を 発表 DE 内容 よく まとめる 産出の意の補語

「まとまる/まとめる」に対応する<整理 zhenli>も、(6)に示すように、能格動詞である。

- (6) a. 他 把 心里 想说 的话 整理 了 *(出来)⁶⁾。
 Ta ba xinli xiangshuo de hua zhengli le chulai.
 彼 BA 心中で 話したい DE 話 整理する 完了 産出の意の補語
- b. 心里 想说 的话 终于 整理 *(好) 了。
 Xinli xiangshuo de hua zhongyu zhengli hao le.
 心中で 話したい DE 話 やっと 整理 目的達成の意の補語 完了

(6a)は使役状態変化他動詞文、(6b)は状態変化自動詞文であるが、いずれも、主動詞<整理 zhengli>は、形態を変えずに他動詞にも自動詞にも用いられる。もう一つ、ここで注目すべきは、<整理 zhenli>は、中国語では、動詞の語彙の意味として結果性を内包しない行為動詞であり、産出の意味を表す<出来 chulai>という補語や、目的達成の意味を表す<好 hao>という補語をつけないと結果性が保障されず、非文法的になる、という点である。

ここで、結果性の内包という視点から、何故、中国語母語話者が使役状態変化他動詞を使うべきところに、状態変化自動詞を用いるのかを考えてみたい。Tai(1984:291)は、中国語では単一動詞が完結性をもたず、結果性を表す補語を付加して初めて完結性が保証されるとして、以下の(7)のような例を挙げている。

- (7) a. 张 三 杀 _____ 了 李四 两次, 李四 都 没 死。
 Zhangsan sha le Lisi liangci, Lisi dou mei si.
 張三(人名) 殺そうとする 完了 李四(人名) 二回 李四 いずれも 否定 死ぬ
 張三は李四を二回殺そうとしたが、李四はいずれも死ななかった。
- b. *张 三 杀 _____ 死 了 李四 两次, 李四 都 没 死。
 Zhangsan sha- si le Lisi liangci, Lisi dou mei si.
 張 三 殺そうとする 死ぬ 完了 李四 二回 李四 いずれも 否定 死ぬ
 *張三は李四を二回殺したが、李四はいずれも死ななかった。

(7a)では、<杀 sha>は、英語の kill や日本語の「殺す」と異なり、行為の対象の死という結果性を内包せず、「対象を殺そうとする行為」動詞にすぎない。よって、(7a)のように、「張三は李四を殺そうと二回行為を起こしたが、二回とも李四は死ななかった」という文が可能となる。一方、<杀死 sha-si>という「活動動詞と到達動詞⁷⁾」が複合された複合動詞では、完結性が保証され、英語の kill や日本語の「殺す」と同様、対象の状態変化、即ち対象を死に至らしめたという行為の目的達成が保証されている。

Mochizuki(2004:145)、申(2005:248-249)、中島(2007:56-60)がすでに指摘しているように、日本語の自他対応の動詞ペアのうち、「-e-他動詞/-ar-自動詞」ペア(e.g.植える/植わる、伝える/伝わる)に対応する中国語として、(8)に例示するような、結果補語を付加することによって結果性が保証され、能格用法をもつようになる述語形式が典型の一つとして挙げられる。

- (8) a. [v_v 働きかけ動作他動詞 + 結果補語]
 e.g. -好 hao (動作の結果、理想的状態に至ったことを表す)

-満 man (動作の結果、ある場所がいっぱいになったことを表す)

-到 dao (動作の結果、動作目的が達成されたことを表す)

-掉 diao (動作の結果、対象が消失したことを表す)

-出来 chulai (動作の結果、ある事物が産出したことを表す)

- b. 种 zhong (植える) + 好 hao → [vi 种好 zhonghao] (他動詞: 植えた結果、植わる。)
- c. <結果述語の付加→結果事象の前景化→自動詞化 (脱使役化⁸) >
 [vi 种好 zhonghao] → [vi 种好 zhonghao] (自動詞: 植わる。)

(6)でみたように、<整理 zhenli>に産出の意味を表す<出来 chulai>という補語や、目的達成の意味を表す<好 hao>という補語をつけないと結果性が保障されず、日本語の「まとめる/まとまる」と同義にはならない。ここで、一つの仮説として、中国語母語話者は、日本語の中間言語として以下のような法則をもちうる、という(9)のような仮説を提示したい。

- (9) 日本語の自他対応のペアにおいて、他動詞の形は、完結性をもたない行為動詞で、自動詞の形は、完結性をもつ行為動詞であるという法則が中国語母語話者の潜在意識に存在する。この仮説に基づけば、中国語母語話者が自他の対応がある動詞の混同を起こす現象において、他動詞を用いるべきところに自動詞を用いる混同を顕著に起こす要因として、自動詞の形式が完結性をもつから、結果状態を表すときには自動詞の形式を選択するという要因が導かれる。さらに、誤用例を紹介しておこう。

- (10) a. 現在夏にもビジネスマンが変わらないスーツを着て、仕事をするが、暑い季節が人の気持を変わって (変えて) しまう。(CC604_2)
- b. 最近、夏季軽装に変わる (変える) ことは環境にもよい影響をあたえる。(CC604_2)
- c. 話し方に断続性を感じ、つながってあって (つなげて) ほしいなど。(CC702 口)
- d. 聴衆を見ていて伝わりたい (→伝えたい) という感じがありました。(HC703 口)
- e. ゆめをかなう (かなえる) ことは、人間にとって、これ以上の喜びはないでしょう。(CC703_1)
- f. 言語学者はつながったままのボタンを学習者に渡った (渡した) が、解く方法を教えない。(CC703_5)
- g. この広告はただ 30 秒の劇的な演出で、商品の特徴と価値を視聴者につたわった (つたえた)。(CC711_4)
- h. ジェスチャーでも加わった (→加えた) 方がいいのでは。(CC801 口)

1.1.1.2 自動詞を使うべきところに他動詞を用いた混同

次に、自他対応がある和語動詞で、自動詞を使うべきところに他動詞を用いている誤用例は4名の学習者において6例みられたが、収集例全てを以下に挙げる。

- (11) a. 広告ポスターの上に載せている (→載っている) 人物は、日本の中で、とても有名な歌手、本田美奈子。(CC701_3)
- b. 梅雨の時、連続的な雨が続け(→続き)、気嫌が天気によって悪くなる人は少なくない。外出にも不便だし、どこでも変な臭いがしている。(CC804_4)
- c. それに連続雨で溜める (→溜まる) 水量もかなりのものであって、農業用水、夏に使う生活用水などが梅雨に恵まれている。(CC804_4)
- d. 私の記憶で、よく覚えているのは、町の周りに、昔から残した (→残っている) 壁の堀のことだ。(CC804_1)
- e. ある食事処を通した(→通った)時にペットの猫の姿を探し、見つかるとうすぐ猫のしっぽを踏んだり頭をたたいたりしたことがよくあって、あとその店のご主人に見られる前にすばやく逃げたこともよくありました。いたずらではなかった私にとって、それは珍しい記憶です。(CC810_1)
- f. 言語の多様化というと、まず浮かべる (→浮かぶ)のは、外国語の学習である。(CC811_5)

このパターンの誤用においてみられる動詞は、「載る noru/載せる noseru」「残る nokoru/残す nokosu」「通る tooru/通す toosu」と、他動詞の形が、使役と共通性をもつ‘-s-’を含む接尾辞によって形成されていることが注目される。他動詞を使うべきところに自動詞を用いた誤用では、‘-s-’を含む他動詞を含まなかった点も注目すべき点である。

ここにみられる混同は、中国語において使役標識が受動標識よりもより基本的な文型であり、原因を主語にした使役構文が基本文型の一つであることと関連する可能性がある。例えば、(12)のように、中国語では、心理述語が用いられる場合、心理的变化を引き起こす原因・要因を主語にした使役構文を用いることが一般的である。

- (12) a. ドラマ「ドラゴン桜」は、感動させられる (→感動する) 物語です。(CC812_2)
- b. 电视剧 《龙樱》 的 故事 令 人 感动。
 Dianshiju longying de gushi ling ren gandong.
 ドラマ 龍-桜 DE 物語 使役 人 感動する

ドラマ「ドラゴン桜」の物語は、人を感動させる。

(12a)は、学習者による文であるが、「感動させられる」という表現は、誤用ではないが、「感動する」と心理状態を経験する人を主語にした構文のほうが日本語では自然に感じられる。一方、中国語では、(12b)のような原因主語使役構文は基本構文の一つであり、こうした中国語の特性によって、学習者が、使役標識に用いる‘-s-’が用いられた他動詞形を無意識のうちに選択する可能性がある。

1.1.2 複合動詞における自他の誤用

次に、複合動詞の後項動詞の自他対応に関わる誤用例として、表 2 に示すように、8 名の学習者による 9 例の誤用が観察された。注目すべきは、複合動詞中の自他の誤用に関しては、他動詞を使うべきところに自動詞を用いた誤用のみで、他動詞を使うべきところに自動詞を用いた誤用がみつからなかったという点である。

表 2 複合動詞における自他の誤用

混同のタイプ	誤用数	誤用を起こした学習者異なり数
I *自動詞 (→他動詞)	9 *読み続く (→読み続ける) *生まれ出す (→生み出す)	8
II *他動詞 (→自動詞)	0	0
計	9	8

以下の(13)に実際に観察された誤用例 9 例全て挙げる。

- (13) a. 主人公は 2 秒ほど新聞を読み続いている(→続けている)とき、読売新聞のロゴが浮かび上がる。(CC808_4)
- b. 大手、小手のメーカーはずいぶん工夫し、観客に覚えさせようを目指し、コマーシャルを作りつついる (→続けている)。1(CC808_4)
- c. わたしは目を丸めて顔を近づき(→近づけ)、一枚一枚の花びらの姿を見つけようとした。(CC703_3)
- d. 私は十八年ずっとこの町の発展を見届いて (→見届けて) きた。(CC804_6)
- e. かえって、自分の靴を蹴飛ばして、ベンチの背もたれの隙間に突き刺さった。

(→突き刺してしまった) (CC601_3)

- f. ただ、声が少し小さくて後し (→後ろ) に座る人には少し聞き取れ (→聞き取り) づらかった。(CC801 口)
- g. 声量がありますし、はっきりした発音でとても聞きとれ (→聞きとり) やすいです。(CC802 口)
- h. となると、多様化した言語の学習と使用が新しいアイデンティティーを生まれだす (→生み出す) ことにつながるのである。(CC811_5)
- i. 日本というと、すぐ桜を思い出すように、洛陽というと「牡丹花」を思い浮かぶ。(→思い浮かべる) (CC801_1)

(13)の誤用例中、注目すべきは、「*読み続く」「*作り続く」「*見届く」「*生まれだす」という、日本語には存在しない複合動詞が、学習者によって形成されている現象である。影山(1993)は、日本語の[動詞+動詞]型の複合動詞の複合規則として、(14)に示すような形態統語的制約、「他動性調和の法則」を提示しているが、「*読み続く」「*作り続く」「*見届く」「*生まれだす」は、この他動性調和の法則に反する複合である。

(14) 「他動性調和の法則」

日本語の語彙的複合動詞は、原則として、外項をもつか否かの基準により、外項をもつ動詞同士 (他動詞・非能格動詞間) か、外項を持たない動詞同士 (非対格動詞同士) の間での複合しかおこらない。

(14)中の「語彙的複合動詞」とは、一言で言えば、V1 と V2 の間に如何なる統語的操作 (挿入・置換・複合動詞の一部分のみとの照応関係・重複という操作等) も適用されない、語彙部門で形成される複合動詞である。

では、なぜこのような日本語には存在しない複合動詞が形成されるのであろうか。その要因として、学習者が中国語において最も典型的な[動詞+動詞]型複合動詞、即ち結果複合動詞の形成規則に基づいてこうした誤用を生み出した可能性が示唆される。中国語の結果複合動詞は以下の(15)に示すように、前項述語には、全てのタイプの動詞が生起し、後項述語は結果状態を表すため、原則として非対格自動詞又は形容詞である。

(15) a. 結果複合動詞の事象構造及び述語の組み合わせ

	+	
前項述語 (V1)		後項述語 (V2)
1) 事象	原因事象又は先行事象	結果事象
2) 動詞	他動詞/非能格動詞/非対格動詞	非対格自動詞/形容詞

b. 打破 *dapo* (力を加えて壊す/力が加わって壊れる)

摔坏 *shuaihuai* (速い速度で落として {壊す/壊れる})

喊哑 *hanya* (叫びすぎて {声をからす/声がかれる})

累坏 *leihuai* (疲れて {体が壊れる/体を壊す})

また、(15b)に示すように、中国語の結果複合動詞においては、前項述語と後項述語との間に他動性調和の法則のような結合制限もなく、また複合された複合動詞は、(15b)では、他動詞用法と自動詞用法の両方がある能格動詞であり、自他の形態的区別がない。(15a)に示されるような中国語の結果複合動詞の形成規則が、「*読み続く」「*作り続く」「*見届く」といった後項に自動詞を用いる誤用を生み出した可能性があることを指摘しておきたい。

以上の誤用の傾向をまとめると、自他対応のある和語動詞における動詞の自他の誤用は、使役状態変化他動詞を使うべきところに、状態変化自動詞を用いる誤用が顕著にみられ、その要因として、学習者が「自他対応のある自動詞は、完結性を含む行為動詞、他動詞は、完結性を含まない行為動詞」という認識をもっているのではないか、という仮説を提出した。また、複合動詞における後項の自他の誤用の要因が、中国語の複合動詞の典型の一つである結果複合動詞の後項述語が自動詞又は形容詞であることにある可能性を指摘した。

1. 2 漢語動詞における自他の誤用

漢語動詞は、中国語においても同形の動詞が存在するが、動詞の自他において日本語と異なる場合がある。以下に、こうした要因により引き起こされたと推測される誤用例について、使役・受動との関連にも言及しながら考察したい。

表3 漢語動詞における誤用

漢語動詞 誤用のタイプ	誤用数	誤用を起こした 学習者異なり数
I 使役の脱落による誤用 *他動詞用法+する (→自動詞用法+させる)	2 1)海水面を上昇する →上昇させる 2)生活を充実される→充実させる	2
II 使役の付加による誤用	2 1)視聴者に刺激させる →視聴者を刺激する 2)紙の品質を向上させる →紙の品質が向上する	2
III 受動の脱落による誤用 *Vする→Vされる	4 1)形成する→形成される 2)表現する→表現される 3)熟知する→熟知される	4
IV 受動の付加による 誤用	0	0
VII *漢語動詞+になる (→漢語動詞+する)	1 1)混雑になる →混雑する	1
VIII *自動詞用法 →他動詞用法	1 1)状況が緩和することができる →状況を緩和することができる	1
計	10	10

漢語動詞の自他・使役・受動に関しては、表3のような10例の誤用がみられたが、特筆すべきタイプを選んで説明を加えたい。まず、最初の誤用タイプI使役の脱落による誤用には、以下のような誤用がみられる。

- (16) a. 温暖化により、海水面上昇し (上昇させ)、地盤沈下という現象を (→が) 現れた。
(CC601_2)
- b. いつの間にか夏休みももう単にリラックスする休日だけでなく、学生たちが人間性を養って、生活を充実される (→させる) のに欠かせない時期となっている。(CC804_2)

(16a)では、中国語で対応する<上升 shangsheng>も非対格自動詞用法しかないので、当該学習者は、非対格自動詞にもヲ格を付与するという、格助詞の誤用とみなすべきかもしれない。(16b)の「充実する」は、誤用の多い漢語動詞で、中国語では<充実 chongshi>は、「充実した状態」を表す形容詞から派生して、「充実する」という状態変化を表す状態変化自動詞、さらに使役化されて「充実させる」という使役状態変化他動詞にもなる。(16b)では、中国語の<充実 chongshi>が使役状態変化他動詞であるため、受動形式を用いていると推測されるが、日本語の「充実する」は基本的に状態変化自動詞であるため、受動形式がつくと不自然である。ちなみに、「充実する」については、しばしば「*充実な生活」のように、形容動詞の連体形の誤用がみられるが、これは、中国語では<充実 chongshi>は、「充実した状態」を表す形容詞が基本義であるため、「スル漢語動詞」ではなく、形容動詞とした誤用である。

次に、誤用タイプⅡ使役の付加による誤用 2 例は、タイプⅣの受動付加による誤用が 0 であることと対照的である。中国語においては、使役構文のほうが基本文型として認識され、<被 bei>等の受動標識を用いた受動構文は有標な構文とみなされることの反映と推測される。第 2 節でみるように、漢語動詞に限らず、中国語母語話者においては、「～させる」という使役形式を多用する傾向があるのに対して、受動形式の非用による誤用、タイプⅢ受動の脱落による誤用が多い。例えば、「形成する」は、日本語では他動詞用法が基本であるが、中国語の<形成 xingcheng>は、自他両用の能格動詞である。このため、「形成する」を自動詞的に用いる誤用が二人の学習者にみられた。

- (17) a. 中国は 5 6 民族で形成した (→形成された) 国である。(CC702_5)
- b. 人類社会が形成する (→形成された) 最初は、アイデンティティーという概念がなかった。(CC808_5)

次に、「混雑する」を「*混雑になる」とした誤用も、中国語では、「混雑した」状態を表す形容詞<拥挤 yongji>が、「～になる」に相当する<变得 biande>の後に置かれる結果述語であることに起因する。日本語の漢語動詞は、「充実する」「混雑する」「退屈する」等形容詞的概念を表す漢語にも、「する」が付くが、中国語母語話者は、形容詞的概念を表す漢語には、「する」を

付けるのを無意識のうちに回避するようである。

- (18) a. しかし、電車の車両を増やさない限り、いろいろな限定車両を導入することによって、他の車両はもっと混雑になり（→混雑し）、その反面限定車両は空いているという効率性の低下をまねくおそれがあると思う。 (CC603_8)
- b. 如果 不 增加 新的 车辆, 其他的 车辆 将会 变得 更 拥挤.
 Ruguo bu zengjia xinde cheliang, qitade cheliang jiang hui biande geng yongji.
 仮説 否定 増やす 新しい 車両 他の 車両 未来 なる 更に 混雑

最後に、「緩和する」を考えよう。

- (19) 「緩和する」
- a. 状況が緩和する(→を緩和する)ことができると思う。(CC602_2)
- b. 我 想 状 况 应该 可以 缓和.
 Wo xiang zhuangkuang yinggai keyi huanhe.
 私 思う 状況 ~はずだ ~できる 緩和する

日本語の漢語動詞「緩和する」と<缓和 huanhuo>は、共に能格動詞で、自動詞用法も他動詞用法もある。しかし、(19a)においては、「緩和することができる」という可能表現がついて、動作主性が前景化されているため、「状況を緩和することができる」と、他動詞用法でなければ不自然である。一方、対応する中国語(19b)は、<状況 zhuangkuang>が自動詞用法の<缓和 huanhuo>の主語となっていることが語順からわかる。語順から、主語に相当する「状況」に「が」を選択すると推測される。

2 使役形式の誤用

先にみた漢語動詞に関わる使役形式の誤用も再度収録して、使役形式の誤用についてまとめると、表4のようになる。

表 4 使役形式の誤用

混同のタイプ	誤用数	誤用を起こした学習者異なり数
I 使役形式の脱落による誤用	2 1) 海水面を上昇する →上昇させる 2) 生活を充実される →充実させる	2
II 使役形式の付加による誤用	5 1) 視聴者に刺激させる →視聴者を刺激する 2) 紙の品質を向上させる →紙の品質が向上する 3) 混ませる→混んでいる 4) 感動させる→感動する 5) 持たせる→持ってもらう	5
計	7	7

使役形式に関しては、脱落による誤用よりも、付加による誤用のほうが多い。そのうちの一例を考察しよう。

(20) a. たくさんの店が道路の両側の空いている場所を占めて、歩行者が歩けないほど混ませました (→混んでいました)。 (CC808_1)

b. 许多 店家 占据 了 道路 两旁 的 空地,
 Xuduo dianjia zhanju le daolu liangpang de kongdi,
 沢山の 店 占める 完了 道路 両側 DE 空いている場所
 使得 道路 变得 很 拥挤。
 shide daolu biande hen yongji.
 ~をひきおこす 道路 ~になる とても 混雑する

(20a)で、「*混ませる」という使役形を用いた誤用の要因は、中国語では、(20b)のように、「たくさんの店が道路の両側を占拠している」という原因事象が、<使得 shide>という CAUSE の意味を表す動詞によって、「道路が大変混雑する」という結果事象に至った、ということを示す二

文からなる因果関係の構造に起因すると推測される。<使得 shide>という動詞や、原因事象が結果事象を引き起こした、という中国語の使役構造が中国語母語学習者の潜在意識にあるために、「道を混ませた」という使役文を形成していると推測されるのである。しかし、日本語では、原因事象を主語にとって、「道を混ませる」という使役表現は非常に不自然で、「たくさんの店が道路の両側に並んでいるので、道は人が歩けないほど混んでいました」という、因果関係を表す接続詞で二文を連結しなければならない。

中国語母語話者である日本語学習者に、「させる」を付加することによる誤用が多いのは、中国語が、「原因事象を表わす文+使役標識を用いて結果事象を表す文」という文型を基本文型の一つとすることに起因する。

3 受動形式の誤用

中国語においては、<被 bei>という受動標識を用いた受動文は、原則として被害の意味が含まれるため、英語や日本語のように、被害の意味を含まず、自動詞的な構文の代わりに用いられることが少ない。中国語には、自動詞・他動詞の形態的区別や、形態的主格・対格もないため、ヴォイス上の形態統語的な制約を受けずに、状態変化を被る対象を主題として文頭に置き、動詞の形態を変えずに(21)のような主題文を作ることができる⁹⁾。

- (21) a. 黄 老师 的 书 已经 出版 了。
 Huang laoshi de shu yijing chuban le.
 黄 先生 DE 本 すでに 出版する 完了
- b. 黄先生の本は、すでに{??出版した/出版された}。

(21a)のような主題文は、中国語学では、受動標識がつかない「意味的な受動文」と呼ばれているが、ヴォイス上の制約がきつい日本語においては、「出版する」は他動詞用法のみで、「出版される」と受動形式を用いなければならない。同様の現象が、中国語母語話者が日本語における「受動形式の脱落」という誤用を引き起こしていると推測される。作文コーパスから受動形式に関わる誤用例を拾い上げ、漢語動詞に関わる受動形式の誤用も再度収録して表5にまとめよう。

表 5 受動形式の誤用

誤用のタイプ	誤用数	誤用を起こした学習者異なり数
I 受動形式の脱落による誤用	7 1)形成する→形成される 2)表現する→表現される 3)熟知する→熟知される 4)受け入れやすい→受け入れられやすい 5)見えない→見られない	7
II 受動形式の付加による誤用	0	0

ここで、しばしば誤用がみられる「見る」「見える」「見られる」について例を挙げよう。

(22) a. タクシー以外のカーはあまり見えない (→みられない) です。 (CC809_1)

b. 除了 计程车 以外, 看不到 其他的 车辆。

Chule jichengche yiwai, kanbudao qitade cheliang.

~をのぞいて タクシー 以外 見えない 他の 車両

中国語では、「見る」<看 kan>に、行為目的の達成を保証する<到 dao>を付加した<看到 kandao> (見える)、見る行為はしても、目的が達成されなかったことを表す可能補語形式<看不到 kanbudao> (見えない)の三形式が、各々「見る」「見える」「見えない」に対応する。この三形式には、<被 bei>という受動標識は生起しないので、「見られる」という日本語でしばしば用いられる受動形式は、「見えない」と誤用されることが多いのである。

4 可能形式の誤用

すでに、楊(1989:151)、張(1998)及び張(2001:94-105)において指摘されているように、日本語の状態変化自動詞は、中国語では結果補語や可能補語の形式に対応することがある。(8)で前述したように、中国語では単音節行為動詞は原則として完結性を内包せず、結果補語を付加することによって完結性を保証するのである。たとえば、<看 kan>は行為動詞であり、「見た」結果、「見える」ならば、<看到 kandao>と結果補語<到 dao>を付加する。もし、「見た」けれども、「見えない」ならば、<看不到 kanbudao>と結果補語<到 dao>を否定する可能補語形式をとら

なければならない。

日本語では状態変化自動詞に、結果と可能の意味が融合されているのに対し、中国語では、行為、結果、可能の意味が個別に、分析的に表現される。このため、中国語母語話者が日本語の状態変化自動詞、例えば、「病気が治る」に可能形式を付加することによる誤用「*病気が治れる」がしばしばみられることは、すでに指摘されてきたことである。

本稿で扱う作文コーパスにおいても、表6にまとめられるような可能形式の付加による誤用が顕著にみられた。

表6 可能形式の誤用

誤用のタイプ	誤用数	誤用を起こした学習者異なり数
I 可能形式の脱落による誤用	1 言う→言える	1
II 可能形式の付加による誤用	13	9
計	14	10

以下、可能形式の付加による誤用例を挙げよう。

(23) a. 緊急医療現場では、医療画像ネットワークシステムが大いに活躍できる (→活躍する) 空間でもある。(CC811_3)

- b. 在 紧急 医疗 现场, 也 有 医疗用 画像 网路 系统
 Zai jǐnjǐ yīliào xiānchǎng, yě yǒu yīliào yòng huàxiàng wǎnglù xìtǒng
 ~で 緊急 医療 現場 も ある 医療用 画像 ネットワーク システム
 * (可以) 活跃 的 空间。
 keyì huóyuè de kōngjiān.
 できる 活躍する DE 空間

(23)では、主語「ネットワークシステム」は無生物なので、「活躍できる」という生物を主語に要求する可能表現は日本語では不可能であるが、中国語では、(23b)が示すように、可能表現がないと非文法的である。

以下の(24)(25)は、日本語では「成立する」「通じる」には、結果と可能の意味が動詞の語彙の意味として内包されているため、可能形を使わないが、中国語では可能形がないと非文法的

である。

- (24) a. 言語がなければ、コミュニケーションも成立できない (→成立しない)。(CC812_5)
 b. 如果 没有 语言, 人与人 之间的 交流 就 不 *(能) 成立。
 Ruguó meiyǒu yǔyán, rén yǔ rén zhījiān de jiāoliú jiù bù néng chénglǐ.
 もし ない 言語 人と人 の 間 DE 交流 ~ば 否定 ~できる 成立する
- (25) a. 言葉を省略しても意味が通じられる (→通じる)。(CC812_5)
 b. 即使 省略 了 话语, 意思 还是 *(可以) 相通。
 Jìshǐ shěnglüè le huàyǔ, yìsī hái shì keyǐ xiāngtōng.
 たとえ 省略する 完了 言葉 意思 やはり ~できる 通じる

最後に、最も誤用が多かった例「*聞き取れやすい」を挙げる。この誤用例は、中国語母語話者のみならず、韓国語母語話者にも多くみられたが、少なくとも、中国語では、可能補語<听得懂 *tīng de dǒng*>という形式を用いなければならない。

- (26) a. とても聞き取れやすい (→聞き取りやすい) 話し方です。(HC8_口)
 b. 很 容易 就 让 人 听 得 懂 的 说话 方式。
 Hěn róngyì jiù ràng rén tīng de dǒng de shuōhuà fāngshì.
 とても ~やすい 接続副詞 使役 人 聞く-できる-分かる DE 話す 方式

終りに

本稿では、中国語を母語とする上級日本語学習者の作文コーパスから、動詞の自他・使役・受身・可能に関わる誤用を拾い上げ、中国語の特徴との対照を試み、母語干渉の要因について考察した。結論をまとめると以下のとおりである。

第一に、動詞の自他の誤用は、誤用数が最も多かった。特に顕著なのは、自他対応のある和語動詞において、他動詞を使うべきところに、自動詞を用いる誤用が多い点である。この誤用の要因として、中国語においては、働きかけ行為動詞が、単一動詞の形では、基本的に完結性を内包しないため、結果補語を付加することによって、日本語の自他対応のある自動詞を形成する現象が考えられる。仮説として、中国語母語話者は、日本語の自他対応のある自動詞を完結性をもつ使役状態変化動詞とみなして、日本語の自他対応のある自動詞を過剰に使用して誤用に至る可能性を指摘した。また、他動詞を使うべきところに、自動詞を使う誤用は、複合動詞の後項においてもみられ、この誤用は、中国語の複合動詞の典型である結果複合動詞の構造

において、後項述語が非対格自動詞又は形容詞であることに要因がある可能性を指摘した。

第二に、使役の誤用は、使役の付加による誤用が顕著である。日本語が無生物主語文を避ける特徴があるのに対して、中国語では、原因主語をとる使役構文が基本文型の一つであり、こうした日中語の相違が使役形式の付加による誤用を招いている可能性がある。

第三に、受身の誤用は、受動形式の脱落による誤用が顕著である。この要因として、中国語では、主題構文が卓越しており、受動標識を使わない「意味上の受動文」を許すため、主語、格標識、述語間の形態統語論的な制約がきつい日本語とは異なり、主題と述語間の形態統語論的な制約が緩やかであることが考えられる。

第四に、可能の誤用は、可能形式の付加による誤用が顕著である。これは、中国語の働きかけ単一行為動詞が結果と可能の意味を単独では内包しないため、日本語の状態変化自動詞に対応する形式として、結果補語の付加、さらに結果を肯定または否定する可能補語の付加が必要であることに起因することを指摘した。

注

- 1) 本稿は、平成19年度～22年度科学研究費助成基盤研究A・「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」(研究代表者川口裕司、科研費No.19202015)の助成を受けた研究成果である。
- 2) この作文コーパスは、平成19年度～22年度科学研究費助成基盤研究A・「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」(研究代表者川口裕司、科研費No.19202015)の助成を受け、片山晴一(2006年度～2008年度)、荻原典子(2006年度)、福田翔(2007年度～2008年度)、椎名めぐみ(2007年度～2008年度)、岩瀬和恵(2008年度)により文字化・整理され、筆者が監修を行った。文章表現Bクラスの授業を担当された村尾誠一教授から、作文コーパス収集に多大なご尽力を頂き、ここに感謝申し上げます。さらに、学習者コーパスを研究目的に使用することを承諾してくださった日本課程留学生の皆さんにも、感謝の意をここに記したい。
- 3) <的 de>は、連体修飾部(名詞、形容詞、関係節等)と修飾される名詞の間に挿入される助詞。
- 4) <着 zhe>は、動詞の後に付いて持続相を表すが、ここでは、「場所+動詞-着 zhe+名詞」という文型の存在や出現を表す「存現文」において、動作の結果持続を表す。
- 5) <把 ba>は、動詞に後続する目的語を動詞の前に前置した際につく対格標識である。目的語の前置に関わる意味的条件として、動詞の他動性が強く、目的語への影響度が高い場合にのみ可能で、しばしば動詞は結果複合動詞の形式をとる。また、結果複合動詞の目的語は、一般には<把 ba>により前置され、結果述語が文末に位置することにより、結果述語が情報焦点を担い、前景化されるという効果を持っている。
- 6) *(出来)は、括弧内の語句が脱落すると非文法的であることを示す。
- 7) Vendler(1967)の動詞分類における、完結性をもつ瞬間動詞である「到達動詞」(Achievements)を指す。
- 8) 影山(1996:183-194)による。
- 9) Li and Thompson(1976)は、この現象を根拠の一つとして、中国語は主題卓越型、英語は主語卓越型、日本語は主題・主語両者卓越型という分類をしている。

参考文献

- 黄淑妙・関口要. 2005. 「台湾人学習者の動詞文に関する誤用分析—日本語作文データベース利用を中心に—」『台湾日本語文學報』20号.389-411. 台湾日本語文學會.
- 市川保子.1997. 『日本語誤用例文小辞典』凡人社.
- 影山 太郎. 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山 太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版.
- Li, N. Charles and Sandra A. Thompson.1976. "Subject and Topic: A New Typology of Language."In Li, N. Charles(ed.) *Subject and Topic*. 457-489. New York: Academic Press.
- 望月圭子. 1990. 「動補動詞の形成」『中国語学』237 : 128-137. 日本中国語学会.
- 望月圭子. 2003. 「日本語と中国語における使役起動交替」『松田徳一郎教授追悼論文集』236-260. 研究社出版.
- Mochizuki,Keiko. 2004. *Causative and Inchoative Alternation: Comparative Studies on Chinese and Japanese*. PhD dissertation. Taiwan TsingHua University.
- Mochizuki,Keiko. 2007. "Patient-Orientedness in Resultative Compound Verbs in Chinese."In Yuji KAWAGUCHI (et al.), *Corpus-Based Perspectives in Linguistics*.287-300. John Benjamins Publishing Co.
- 望月八十吉. 1982. 「日本語から中国語を眺める—その2—」『日本語と中国語の対照研究』第8号:1-18. 日本語と中国語対照研究会編.
- 望月八十吉. 1992. 「日中両国語における能格的表現」『日本語と中国語の対照研究論文集』49-67. くろしお出版.
- 中島悦子. 2007. 『日中対照研究 ヴォイス—自他の対応・受身・使役・可能・自発』おうふう.
- 申 亜敏. 2005. 「中国語の自他と結果表現類型」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』231-266. ひつじ書房.
- 申 亜敏. 2007. 「中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.3』195-229. ひつじ書房.
- Tai, James H-Y. 1984. "Verbs and Times in Chinese: Vendler's Four Categories". *Lexical Semantics*. 289-96. Chicago Linguistic Society.
- 湯 廷池. 1989. 「詞法與句法的相關性：漢、英、日三種語言複合動詞的對比分析」『漢語詞法句法續集』147-211. 臺灣學生書局.
- 湯 廷池. 1992. 「漢語述補式複合動詞的結構,功能與起源」『漢語詞法句法四集』95-164. 臺灣學生書局.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- 楊 凱采. 1989. 『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』くろしお出版.
- 由本 陽子.2005. 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』ひつじ書房.
- 張麟声. 2001. 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク.
- 張威. 1998. 『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお出版.

Error Analysis in Voice by Advanced-level Chinese Learners of Japanese: Comparative Analysis with Chinese

MOCHIZUKI Keiko

This paper focuses on the errors made in voice, namely, transitive/intransitive verbs, the potential form, the causative form and the passive form, found in a corpus of essays written by advanced-level Chinese learners of Japanese and by making a comparison with Chinese, aims to present the reasons, due to Mother Tongue Interference from Chinese, and the patterns of these errors made in the process of learning Japanese.

First, for errors made in Native Japanese Verbs with transitive and intransitive forms, the most obvious error is not using the required transitive form but the corresponding intransitive form. This is believed to be due to the following typological characteristics of Chinese, that is, 1) there are no distinct transitive and intransitive morphological forms in Chinese, 2) Chinese is Topic-Oriented, in the sense that the sentence-initial noun phrase is seen more as a “Topic” stating what the sentence is about, than as the grammatical function “Subject”, 3) Chinese is Patient-Oriented because as a sentence pattern predicating a change-of-state event, the most common pattern is one where the entity undergoing the change of state, the Patient, is positioned as the Topic and the sentence is transitive. These characteristics are believed to cause such errors.

Second, for errors made on the potential form, e.g. *waka-rare-ru (can understand), *tujui-rare-ru (make oneself understood) etc., errors are commonly found in the addition of the potential suffix to Native Japanese Verbs with the connotation of “telicity”. In principle, one-word/simple verbs in Chinese do not have the connotation of “telicity” and it is believed that the cause of these errors can be traced back to the [Causative Verb + Change-of-state Resultative Predicate] form of the Resultative Compound Verb.

Third, for errors on the causative form, the excessive addition of the causative suffix is the most common. This is because one of the most basic sentence patterns is a causative sentence where the cause is the subject is, and especially for psychological predication, one of the most basic sentence patterns is where a causative event causes a particular psychological change. These characteristics of Chinese are believed to have caused these errors.

Finally, for errors on the passive form, the pattern of not using the passive form when it is required (omission) is the most common. This is believed to be caused by the facts that in principle, the passive form in Chinese has a meaning of adversity and is therefore not used as frequently as in Japanese, and that the Japanese passive corresponds to the Chinese [Topic + Ergative Verb] form with no passive marking.